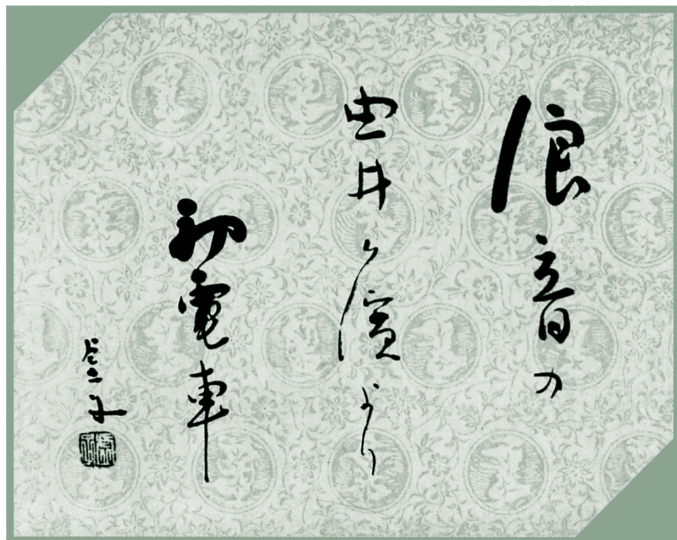


詠 詠 集

三 月 号



花鳥諷詠®



令和3年3月 ■ 第396号 ————— 目次

第三十二回日本伝統俳句協会賞 2

協会賞	「水の賦」	田中 黎子
新人賞	「小さな冒険」	椋 麻里子
協会賞佳作	第一席 「祈る日日」	水田むつみ
	第二席 「丘の小学校」	生澤 瑛子
	第三席 「闘 鶏」	森脇 杏花
	第四席 「誰も・・・」	大西としみ
	第五席 「南氷洋」	和田 和子

花鳥諷詠選集 木村 享史10

岩田 公次12

虚子研究 『六百五十句』 研究 (15)15

虚子研究 虚子宛書簡を読む (二十)

虚子宛碧梧桐書簡 明治二十四年七月六日(托封書) 後編 黒川 悦子20

一頁の鑑賞..... 和田 和子26

原田 佳織27

この人の作品 上林 純子28

新刊紹介29

地区行事開催日程表31

編集後記32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

花鳥諷詠選集

木村享史 選

特選五句

自分史を明日につなぐ日記買ふ

福岡 梶原 敏子

一字なら命と思ふ年暮るる

鳥原 八木 花栗

鶴舞うて天上の刻ゆるやかに

神戸 島崎 ずらん

煤 払 大きな音は 厨 から

宇部 爲近 正子

マスクして淋しき顔に蓋をする

三田 吉村 玲子

二句短評

一句目——「自分史」というのは色川大吉の造語、それも遠い昔のことではないが、すっかり定着した。

作者も丹念に來し方を綴られている、更に明日へと続く生涯のために日記を求めた。前向きなのである。

二句目——コロナ禍騒ぎの令和二年、年末の風物詩として発表された「今年の漢字」は「密」であった。

作者はご自分ならば「命」であろうと仰る。むしろその方が掛け替えのない尊い一字かも知れない。

入選六十句

生り年の袖子に囲まれ一軒家 阿南 田中 栄子

末枯も石ころ道もなつかしき 香川 福家 市子

帯塚の鳥語ゆるびて冬ぬくし 那珂川 池田ひさ絵

冬晴の流れれたひらや梓川 金沢 松平紀代子

迷ひしと気が付くまでの紅葉山 高松 金沢 正恵

美男葛寄つてたかつて取りにけり 松山 篠原みどり

眠り初む山の寝息のやうな風 筑紫野 多田 蒼生

银杏散る未読のままに返却日 高知 和田 和子

一と夜さの雨に冬めく峽の宿 柏原 早川 水鳥

失敗を笑ひとばして木の葉髪 熊本 渡邊佳代子

立ち向かふ寒さに歩幅大きくす 小千谷 大矢あきこ

一天のさざ波となり鳥渡る 大牟田 介弘 浩司

切干を煮れば昭和が匂ひたつ 札幌 押野 美江

一枚の油絵なりし柿落葉 西脇 岸本 悦子

嬉しさを隠しきれざる子のマスク 北九州 元田 品子

大根の煮詰めて箸の穴二つ 加西 前川 和市
 湯豆腐や何も無き日感謝して 金沢 森田 康夫
 道迂回しても工事や日短 名古屋 辻 美智子
 御洒落する事忘れずに著ぶくれて うきは 大力 妙子
 人訪はず訪はれぬ日々や小鳥来る 鹿児島 永井 紀子
 冬桜淋しきほどに小さき花 浜田 高村美都子
 くしやみまでご機嫌さうな酔つ払ひ 久留米 吉田いづみ
 歩幅にも小春日和といふ余裕 福岡 島原 仁代
 鯉はねる音一つなき池の冬 うきは 宮崎みゆき
 息災な夫の饒舌根深汁 金沢 松下 薫
 山陰の雲厚き空冬ざるる 萩 河野 祐子
 帰り花たつた二輪をいとほしむ 井原 平 春陽子
 年用意母の流儀の生きてをり 金沢 石名坂房枝
 忍び寄る寒さ潜んでゐる寒さ 神戸 池田雅かず
 水軍の島を沈めて冬霞 神戸 小柴 智子

要塞の深き傷あと草の花 久留米 平岡 清志
 散り敷ける紅葉ぬれたる色重ね 阿南 かつせ千津
 花枝かすかな風のと き匂ふ 横浜 久保 理江
 空中を一回転や枯葉散る 大牟田 前原八寿之
 大根引く半農半漁なる暮し 大阪 中本 宙
 寒くとも行く手青空見えて来し 久留米 谷川 章子
 東京の夜景丸ごとクリスマス 白岡 細井 路子
 野の風に匂ひ残りし焚火跡 高松 岩瀬由美子
 せせらぎの水の光も小春かな 太宰府 野田 杉子
 一日の疲れしマスク外しけり 松山 門田 智子
 冬晴や視野をはみ出す水平線 大牟田 猿渡 章子
 島大根一万本の出荷かな 熊本 児玉 胡餅
 観音にポインセチアの鉢の供華 東京 柿崎 典子
 行列の距離あけて待つ寒さかな 奈良 三谷 啓子
 追ひつけぬ心どこかに師走かな 春日 牟田 節子

● 岩田公次選

特選五句

今日も又日和上々吊し柿

山形荒井朋枝

鴨もぐる水音ひとつ余呉の朝

田辺細尾甯代

冬草と戦ふ日々と農日記

和歌山市ノ瀬翔子

おすそ分けてふ一本の松茸を

福岡井野弘子

馴染みたり母の形見のカーディガン

小諸清水節子

二句短評

一句目——好天続きに吊し柿の出来具合も上々の様子。一句のはずんだ調子から、その期待のほどが伝わってくる。

二句目——余呉の朝とは余呉湖の朝。一羽の鴨の動きを描いて、湖の朝の静けさが見事に描かれている。

熱爛や気付けば慣れし一人酒 横浜 守谷 一劍
 風に消えまた風と来て初しぐれ 大牟田 岩永美智子
 千匹の猿を抱きて眠る山 大分 村上 久子
 陣組んで池の真中の鴨となる 四国中央 豊田みゆき
 背に羽根の生えて来さうな小春かな 袋井 湖東 紀子
 水鳥を連れて日向の移りけり 西宮 山谷 彰子
 今日もはや過去となりゆく冬至の湯 岡山 大野 文子
 不器用に生きてしあはせ木の葉髪 高知 西込 とき
 白菜の水の匂ひを真つ二つ 春日 本田 久子
 咳一つ静かに離れゆく一人 鳥取 椋 則子
 風呂吹や今日あることのありがたく 加吉川 瀧 積子
 一筋の音も細りて冬の滝 倉敷 中田 鈴江
 家を出て師走の顔になつてゆく 熊本 武藤 たみ
 川風や冬暖も昨日まで 鹿児島 坂本 啓子
 眉を描きマスク美人となりにけり 尼崎 魚住富美子

入選六十句

二上山見え隠れして片時雨 富田林 鶴岡 言成

亥の子餅配る手伝ひしたる日も 徳島 先山 咲

しばらくはこの道と決め返り花 春日 永利五十鈴

末枯も石ころ道もなつかしき 香川 福家 市子

母とよく来し温泉の径野紺菊 白山 大橋美代子

豪快に捌き夕餉の鱈づくし 金沢 瀬古 祥子

ゴンドラの影すべりゆく霧氷林 鳥原 西田比呂志

屋敷神迎ふる朝の庭を掃く 君津 榎本 静江

牡蠣筏海満々と日を湛へ たつの 竹内 澄子

河豚の宿港の汽笛遠くきく 長岡京 算 双子

水底のみみぢにふれてゆく紅葉 福山 佐藤 浩子

鉦叩たしかに家の中なりし 阿南 湯浅 美美

鴨を待つ天守の空を仰ぎては 吹田 小井川和子

黄葉描く黄葉の彩に染まりつつ 富山 片桐 久恵

甘き香に呼び止められて榎櫃の実 神戸 片岡 橙更

振り返る塔を落ちゆく冬日かな 名張 奥田美代子

帰り花あるかと思れば二つ三つ 徳島 遠藤 和良

山宿の大鍋囲むきのこ汁 長岡 笠原佐千子

手を挙ぐるだけの挨拶冬帽子 高松 浅野クニ子

底冷やお揚げ大きな京うどん 東京 吉里ひとみ

顔見世のまねきあがりし塩を打つ 京都 森 孝子

あるときは漣となり光る鴨 熊本 井芹真一郎

木洩日を操つてをる雪螢 堺 内田 陽子

石路の花庭に明るさ戻りけり 堺 田宮美千代

著ぶくれて背中いよいよ丸くなる 市原 飯塚 咲子

星空に乾杯メリークリスマス 宇部 上田久美枝

同じ道来しに吾だけ草虱 大阪 山内 蘭彦

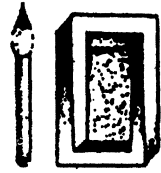
十分の駐車に落葉降り積もる 鎌倉 緒方 初美

大方は引かれて広し大根畑 野々市 辻 文江

珈琲の二杯目苦き夜なべかな 徳島 吉田 有子

百株の冬芽蔵して牡丹寺 七尾 浅井 和子
 牡蠣を剥く手際の良さに見蕩れけり 高松 和泉 金子
 百年の床拭きこまれ櫓明り 富山 高城 玲子
 クリスマスソングカフェーにデパートに 松江 三浦 純子
 花柎かすかな風のととき匂ふ 横浜 久保 理江
 膨らみし苔もあれど菊枯るる 町田 坂下 洋子
 大根引く半農半漁なる暮し 大阪 中本 宙
 湯気立てて残業の子を待つてをり 広島 大井 正治
 思羽を広げ番と見えし二羽 福山 池上 幸子
 あはあはと盛り静かな枇杷の花 四日市 丹羽みどり
 島大根一万本の出荷かな 熊本 児玉 胡餅
 我が世とは君在りてこそ老の春 安来 細田 洋子
 落葉径誰か後ろにゐるやうな 浜田 小池ミサエ
 落葉踏む音の遊んでをりにけり 西予 三瀬 教世
 出荷よりはねられし菊いただきぬ 枕崎 今給黎 雨音

少しでも動かねばとて落葉拾ふ 西予 武知 洋子
 散歩道桜紅葉の華やぎに 宇佐 水野 公明
 退院の吾に何よりの干蒲団 宇部 小林めぐみ
 健やかにありて勤労感謝の日 郡上 谷口 恒子
 陣組んで池の真中の鴨となる 四国中央 豊田みゆき
 妻看取りつつ卒寿越え冬耕す 郡上 曾我とし子
 境内に伸びたる重機松手入 山口 椿 壽子
 擦れ違ひざま焼詣の匂ひたる 島原 池田み生子
 白鳥の湖を狭めてをりにけり 名古屋 山口こひな
 漱石忌帯の輝く新刊書 兵庫 今地千鶴子
 降る雪や見舞叶はぬ姉のこと 青森 長島 喜美
 ちちははの眠る山より秋の声 高知 森口乃里子
 ト口箱の鮫鱈しろき腹さらす 札幌 増田 植歌
 冬耕の無口となつてゐる二人 由布 立川さよ子
 真夜中のフレームの灯の浮かびをり 前橋 戸所 理栄



編集後記

第三十二回日本伝統俳句協会賞の入選者が無事決まりました。詳細は今月号の巻頭と来月号をご覧ください。また、次回第三十三回の募集も九月から始まります。今からご準備頂けますようお願いいたします。

令和二年度第二回常務理事会・理事会も先月号でお知らせしたとおり書面での開催を無事済ませました。ただ、

どうしても直接討議できない物足りなさや残りです。次回こそはと、早く当たり前の日常を取り戻せる日を待ち望むばかりです。

自主退会された方が再入会される際、入会金が免除となるよう定款が改正されてから、初めての該当再入会者がありました。もし周囲に自主退会された方がいらっしゃいましたら、ぜひお声をかけて頂ければ幸いです。

コロナに振り回された令和二年度も

春雷や女ばかりの雛の家

虚子

坊城俊樹前事務局長が協会事務局を退職されて早一年。事務局は華やかな(！)女性ばかりになってしまいました。コロナ禍に加え、慢性的な人手不足は否めませんが、皆様のご協力とご肝要のおかげで何とか業務を維持しています。なお、坊城俊樹常務理事は第三十六回国民文化祭・わかやま2021にて十一月十四日に講演の予定です。お知らせ申し上げます。

終わろうとしています。令和三年度の年会費の振り込み票は次回より六月号まで機関誌に添付しますので、口座引落の手続きをされていない方は、お振り込をお願いします。

花鳥諷詠三月号(通巻第三九六号)

定価二五〇円(但し、本代は年会費を含む)

年会費一〇、〇〇〇円

令和三年三月一日

発行人 稲畑汀子

発行人 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シャンブル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇二六〇七七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一一九二